百味インタビュー

マリ・クリスティーヌさん（国連ハビタット親善大使）

国連のまちづくり・コミュニティ作りに活かされる〝お互い様〟の心

マリ・クリスティーヌさんは、96年よりAWC（アジアの女性と子どもネットワーク）、00年より国連ハビタット、この二つの仕事を通して、今なおアジアに存在する人身売買や買春（かいしゅん）、ストリートチルドレンなどの諸問題に真っ向から取り組んで来られた。これらの解決に最も大切なことは「教育」……「教育には人身売買や買春などをなくす力と可能性がある」と、マリさんは考えている。

振り返って日本には「お互い様」という心地好い言葉がある。「それはある種のメンタルケア」とするマリさんの視点は、いま確実に、途上国でのまちづくり・コミュニティ作りに生かされている。

「まちづくりは人と人とのつながり……女性の視点は生活者の視点」

――国連ハビタット親善大使を務めていらっしゃいますが、どのようなお仕事ですか？

マリ　「国連ハビタット」は、「都市化と居住のための国連機関」のことです。「国際連合人間居住計画」ともいわれます。ひとことで言うと、国連のまちづくりの機関です。

都市化が進む現在、世界中いたるところに、その急激な動きに苦しめられている人たちが大勢います。安心して住むことのできるところや安全な水の確保、都市の過密化問題の解消、インフラの整備、といった生活の基本を整えて、より良いまちづくり、コミュニティ作りをお手伝いするのが、国連ハビタットの仕事なのです。

――「国連ハビタット」の本部は、ケニアの首都ナイロビなんですね。

マリ　1978年にナイロビに設立され、96年にブラジルのリオ・デ・ジャネイロに事務所が開かれ、続いて翌97年日本に、アジア太平洋地域を管轄する福岡事務所が開設されました。私が親善大使に任命されたのは2000年4月のことです。さらに日本では国連ハビタットを支援する目的でNPO（特定非営利活動法人）の「日本ハビタット協会」が設立されました。これは私が副会長を務めています。

日本でもそうですが、コミュニティ作りというのはとても大変で、人々をどのようにして地域作りとか、自分たちのまちづくりに参加していただくか、

マリ・クリスティーヌさん

ということが大きな課題なんです。これを大きな災害とか戦争とかトラウマのある所から、もう1回人々の心のつながり、というものも含めて、していかないと、まちが復興できないのです。それでそれを、様々な地域で、色々な方法で実施しています。たとえばアフガニスタンで行った「命のプロジェクト」。これは井戸づくりのことですが、アフガニスタンは長い間の旱ばつで、飲み水が不足しています。安全な飲料水が確保できないと人々は病気になります。時には命の危険にもさらされます。薬代がかさみ、貧困がますます深刻になるというように悪循環の繰り返しです。人々の暮らしを向上させるために「井戸」は大きな役割を果たします。

――昨年秋のパキスタン大地震の際に、「日本ハビタット協会」は越冬シェルターを贈られました。

マリ　昨年の10月8日正午（日本時間）にパキスタン北部で起きた大地震では7万3000人もの尊い命が失われ、約350万人が被災しました。「日本ハビタット協会」では、「パキスタン地震被災者に緊急越冬シェルターを」という緊急募金キャンペーンを実施致しました。厳しい冬の到来を前に、さらなる犠牲者の増加が懸念されているなか、地震で家を失った住民の安全確保が急務でした。

パキスタンは雪の降る国なので、住む所には絶対屋根が必要です。募金期間を1か月間として資金を

集め、暮れにはシェルターを作りました。パキスタンは家畜を育てている人々が多いのですが、山羊も羊も牛も、同じ屋根の下で共に生活し、それで寒さをしのいでもらったのです。一時的な措置でしたが、皆さんは、冬の寒い時期は、むしろ家畜と一緒のほうが暖かいとおっしゃっていました。この感覚は、農業や牧畜など、土にもっとも近い生活をしている皆さんにはよく分かるようです。昔、日本では天井裏に蚕を飼っていましたね。

そういう所だから自然や生きものにやさしい、明るい心が育つのです。都会で生活していると動物だって飼えない所もあります。幸い私は、命の尊さを感じさせてくれる発展途上国に出かけて行くような仕事をやらせていただいています。

まちづくりは人と人とのつながりでもあるわけですが、女性たちは生活者なので、女性の視点は生活者の視点、であると思っております。

――東南アジアでは、人身売買や買春など国際的問題に取り組んでこられました。

マリ　カンボジアでは、子どもたちがタイなどに売られています。保護された子どもたちは本国に輸送されますが、小さい時、売られてしまったので生まれた村がどこなのか、親が誰なのか分かりません。それでそういう子どもたちが教育を受け、自立できるように活動しているNGO（平和・人権問題などで国際的な活動を行っている非営利の民間協力組織）の組織の建設をお手伝いしています。

ベトナムではNGOと協力して、ストリートチルドレンになった子どもたちのために、学校に行ける家（拠点）作りを手伝っています。そこで暮らし、学び、そこから就職できるような仕組みを作っているのです。子どもは大人に左右され抑圧されることが多いのです。親がいない子どもはストリートチルドレンとなり、買春（かいしゅん）させられたりします。これを何とか食い止めなければいけません。いろんな地域で問題の角度がちがいますが、起きている現象は同じです。これはコミュニティでやるしかありません。

戦後、日本でも親のいない子どもがたくさんいました。日本はそこから立ち上がって世界第2位の経済大国になりました。現在はほとんどの人が教育を受け生活が充実しています。教育には人身売買や買春などをなくす力と可能性があると思います。

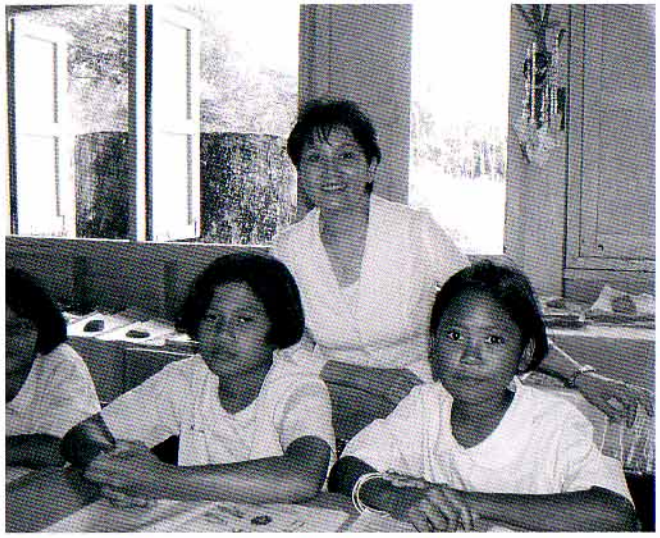
やはり教育ですね。正しい知識を学び、自分たちの権利を知ることにより、子どもたちに希望がわきます。

――タイでも同じように買春の問題に取り組まれました。

マリ　これはAWC（Asian Women& Children's Networkアジアの女性と子どもネットワーク）の仕事です。タイの山岳民族への教育支援です。ここには国籍のない人が多い。ミャンマー、ラオス、タイの国境の周辺はいろいろな民族がいます。ラフ族、リス族、カリン族、モン族……。国籍のない人たちも多く、タイ語ができないと仕事に就くことができません。親は子どもの生活を良くしようと思い、教育を受けさせたいと考えます。しかし、親たちも字が読めないので、人買いにだまされてしまうことがあります。買春で男の性的欲望のために買われて、病気になる子も大勢います。エイズにかかり、体がぼろぼろになって、最終的には自分の村へ返されて死んでしまいます。そこで私たちは、タイの教育局からの要請で、教育局が山の村々で、キャラバン広報をするための資料を作りました。子どもが売られないよう、そしてHIVに関する理解と予防のための紙芝居やビデオです。エイズを持っている人を村八分にしないで、一緒に生活しても感染しないということを伝え、普通に生活してて、無防備な性行為や、麻薬のまわしうちなどをしなければ、HIVには感染しないんですよ、と教えるのです。やはり教育ですね。正しい知識を学び、自分たちの権利を知ることにより、子どもたちに希望がわきます。教師になりたい、看護師になりたい、といった……。

――AWCの仕事は、「国連ハビタット」にかかわる前に、始められました。

マリ　そうです。AWCの発足は96年です。アジアの子どもたちの教育支援として、おもに学校作りをすすめてきました。すでに9校が建ち、3500人の子どもたちが学んでいます。学校建設は、タイの山の中から始めました。



授業中の子どもたちと一緒に（タイ）

学校を作るというのは、そこのコミュニティ作りをしているのと同じなんです。10家族とか20家族とかの集落に行くと、回りに子どもたちが200人とか300人とかいる。すると汚水処理の問題とか、食べるお米をどう供給するかという問題が起きてきます。それで子どもたちが地域の農家のお手伝いをして、畑を耕したり収穫したりするわけです。学校でも子どもたちが、ふだん毎日食べるお野菜を作ったり、豚や鶏を育てたりナマズを飼ったり、するわけですが、……こういうことって実はまちづくりをしていることと同じなんです。

そんなふうに、まちづくりを手伝っていたら、国連から、PR係りとしてハビタットの親善大使になりませんか、と声を掛けられたんです。

国連ハビタットは新しい国連機関でまだ20年の歴史しかありません。日本ではあまり知られていない組織です。日本政府からの拠出金もあり、ハビタットは世界中のたくさんの人々が安全に安心して暮らせるように様々な事業をすすめております。

世界中至るところで都市化が進んでいて、国連の調べでは、2050年には世界の60%が都市生活をすることになるだろう、ということです。

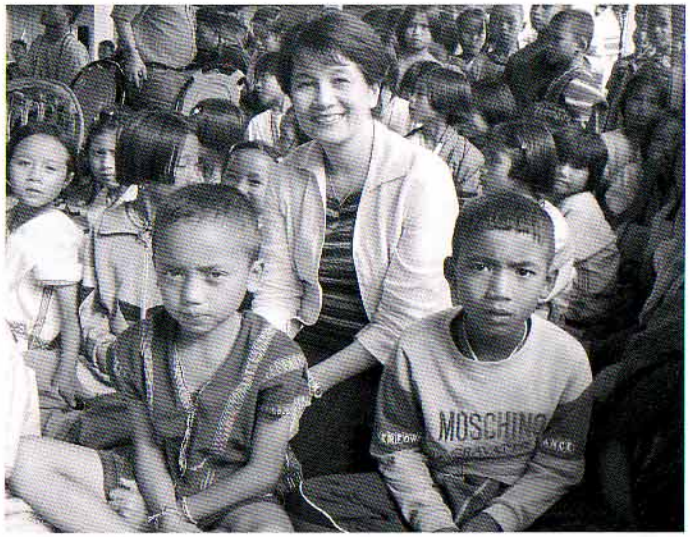
人々が田舎から都会に出てくると、住む所がない、お金もない。線路わきや土手などにバラックを建て生活を始めます。いわゆるスラムです。現在、世界の6分の1の人々がスラムで生活しています。皆んなが健全に生活できる住環境を作らないと、大変なことになります。伝染病の発生とか汚水処理問題とか。やっかいなことが起こります。スラムでは、ふつう家が建たないような所によく山の斜面に家を建てますが、汚水など、溝を作って流せるからです。その下の所が汚水溜めになります。そこに伝染病が発生します。その悪循環を防ぐために、政府、自治体から土地を提供してもらって、区画整理をして、皆んなでどういう自治を作りたいか、ということを考えます。

「昔から日本には〝お互い様〟という、とてもやさしい響きを持った言葉があります」

――AWCや国連ハビタットにかかわるようになった動機は？

マリ　自然の流れですね。上智大学の国際学部の学生時代、新宿におにぎりを配りに行ったり、老人ホームに歌をうたいに行ったりしていました。神父さまが学生を巻き込んで、そんな活動をしていました

今、さかんに「ボランティア」という言葉が使われていますが、そんな言葉を使わなくても、昔から日本には「お互い様」という、とてもやさしい響きを持った言葉があります。要するに近所づきあいですね。庭を掃くのでも、自分の家の前だけを掃くのではなく、両隣もちょいと掃く。すると隣の人にお礼を言われる。「いいえ、お互い様ですよ」と挨拶を返す。そして次にはお隣さんが同じようにやってくれる。コミュニティのつながりができて、それがお互いの防犯にも役立っていました。ふだん見かけない人がいると「どちらかお探しですか？」と声かけるとか。日本の地域作りは近所づきあいでやってきたと思うんです。こんなこと、お付き合い精神でやってきた、立派なボランティアですね。自分の家の廻りに植木鉢を置いて、桔梗やチューリップを咲かせたり、桜をきれいに咲かせたり、これだって社会貢献のひとつです。



新校舎の落成式に子どもたちと一緒に（タイ）

思うに日本人が持っていた気持ち「お互い様」は、ある種のメンタルケアですね。現在、日本ではうっかり子どもに声をかけられない。バカバカしいですよ、これって。日本人は振り子の振りが極端ですね。昔の子どもは、悪いことをすると近所のおじさんにおこられる、というような意識がありましたね。もちろん干渉しすぎてはいけませんが、全くなくなっても困ります。振り子が少し違ったほうへ動いたとき、真ん中に持っていこうという力がどうも働いていないように思います。お互い無関心なのが残念です。

【食べものと私】
結局は「ごはんとつけもの」

体で幸福感を味わえるものは、やはり美味しい食べものです。作るのも好きですが、お店で食べるのも好き、お昼はほとんど外食です。父がイタリア系

で母が日本人ということもあって、大きく分けるとイタリア料理と日本料理が好きです。しかし、実際は、美味しいものなら何でもOKです。

昨年「愛知万博」の広報プロデューサーをつとめた関係で、1年ほど名古屋に住み、名古屋の美味しい店を食べ歩きました。出店していたポーランド料理の「ボルスカ」（その後、名古屋で営業）には毎日のように通って、キノコのスープなど堪能しました。また、さっぱりしたものを食べたくなる時は、名古屋の有名日本料理店の「加瀬」に、美味しい季節のお料理を食べにいっていました。

好きな店、好きな料理はいっぱいあります。しかし最終的に〝ごはんとつけもの〟に戻ります。おばあちゃんのつけものの味がベースです。京都のあるお店の京なすのつけものが大好きです。売り出したら、たくさん取り寄せて、食べ終わると、その糠（ぬか）を、床（とこ）にしてニンジンやキュウリのつけものをつけて、ずっと楽しんでいます。

つけものに限らず、発酵類はすべて好きです。イタリアのパルミジャーノ・レッジャーノも発酵食品ですが、私は好きです。古代ローマのグラデュエーターはこれに生のソラマメをすりこんで体力を養っていたそうです。

仕事関係でいうと、葉山に「ラ・マーレ・ド・チャヤ」を作る時、当時のシェフ熊谷喜八さんたちとフランスに行って、何日かの間、3食フランス料理を食べたことなどなつかしい思い出です。

マリ・クリスティーヌさんプロフィール

日本生まれ。四歳まで日本で暮らし、その後父親の仕事に伴い、ドイツ、アメリカ、イラン、タイ、などで生活。留学のために来日し、学生時代にスカウトされて芸能活動を始める。

諸外国で暮らした体験に基づく幅広い視点から、国際会議・式典などの司会や講演活動などをするかたわら、ボランティア団体AWC（アジアの女性と子どもネットワーク）を設立し、代表を務める。国連ハビタット親善大使。「二〇〇五年愛知万博」の広報プロデューサーとしても、精力的に活動した。上智大学国際学部比較文化学科卒業。

一九九四年、東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻。修士課程終了。

〈主な著書〉

「愛・LOVE・フレンドシップ」中日新聞社
「ありがとう　愛・地球博」ユック舎
「お互い様のボランティア」ユック舎
「自分を生かす人見失う人」海竜社
「心地よい我が家を求めて」TBSブリタニカ
「ひとを素敵と思う朝」立風書房